

友だちを見つめ、自己を高めるための綴り方指導のあり方

～見だし、組み立て、ふり返る指導過程の追究を中心に～

筑後市教育研究所

筑後市立筑後北小学校

教諭 江崎 道子

1. 主題設定の理由

- (1) 社会の要請から
- (2) 国語科の目標から
- (3) 学級の実態から

2. 主題の意味

(1) 友だちを見つめ、自己を高める綴り方とは

ア 友だちを見つめるとは

友達の言動を観察して、その中にある友達の思いや良さを見つけ、捉えることであり、自分を映し出す対照としての友達を、よりよく観察し続けることである。

イ 友だちを見つめ、自己を高めるとは

自己を高めるとは、自分の行為や言動を見つめ、見つけた問題や対象に働きかけながら、よりよい生活を目指していくことである。そのために、対照となる友達の思いや良さを見つけ、捉えることが、有効だと考えた。

ウ 友だちを見つめ、自己を高める綴り方とは

「綴り方」とは、日常生活の中の値うちのある場面を切り取り、「したとおり」「見たとおり」「聞いたとおり」「言ったとおり」「思ったとおり」に順序よく丁寧に書くことによって、友達や自分を見つめ直し、心の動きまでつかむ方法である。友達を見つめることは、自分を振り返ることになり、自己を高めていくことにつながる。

(2) 見だし、組み立て、ふり返る指導過程とは

ア「見だし」とは

綴る最初の過程で、取材の段階。綴る目的と対象を明確にした上でペア活動を組んでお互いに観察し合い、値うちのあることを取材する段階。

イ「組み立てる」とは

綴る2番目の過程で、構想と構成の段階。見つけた題材の中から、値うちのある綴りを選び、主題を設定し構成を工夫する段階。

ウ「ふり返る」とは

構想・構成に基づいて文を綴る中で、自分や友達の言動を思い出し直したり、反省をしたり、意味づけをしたりする記述・推敲の段階。さらに、友達や保護者から評価してもらうことで、自分を見直す過程。

3. 研究目標

友だちを見つめ、自己を高める為の綴り方指導は、

「見だし段階」でどんな活動を、

「組み立てる段階」では、内容と構成の中心や主題を明確にするための工夫を、

「ふり返る段階」では、自己を高めるためにどんな観点で考えさせるかを、究明する。

4. 研究仮説

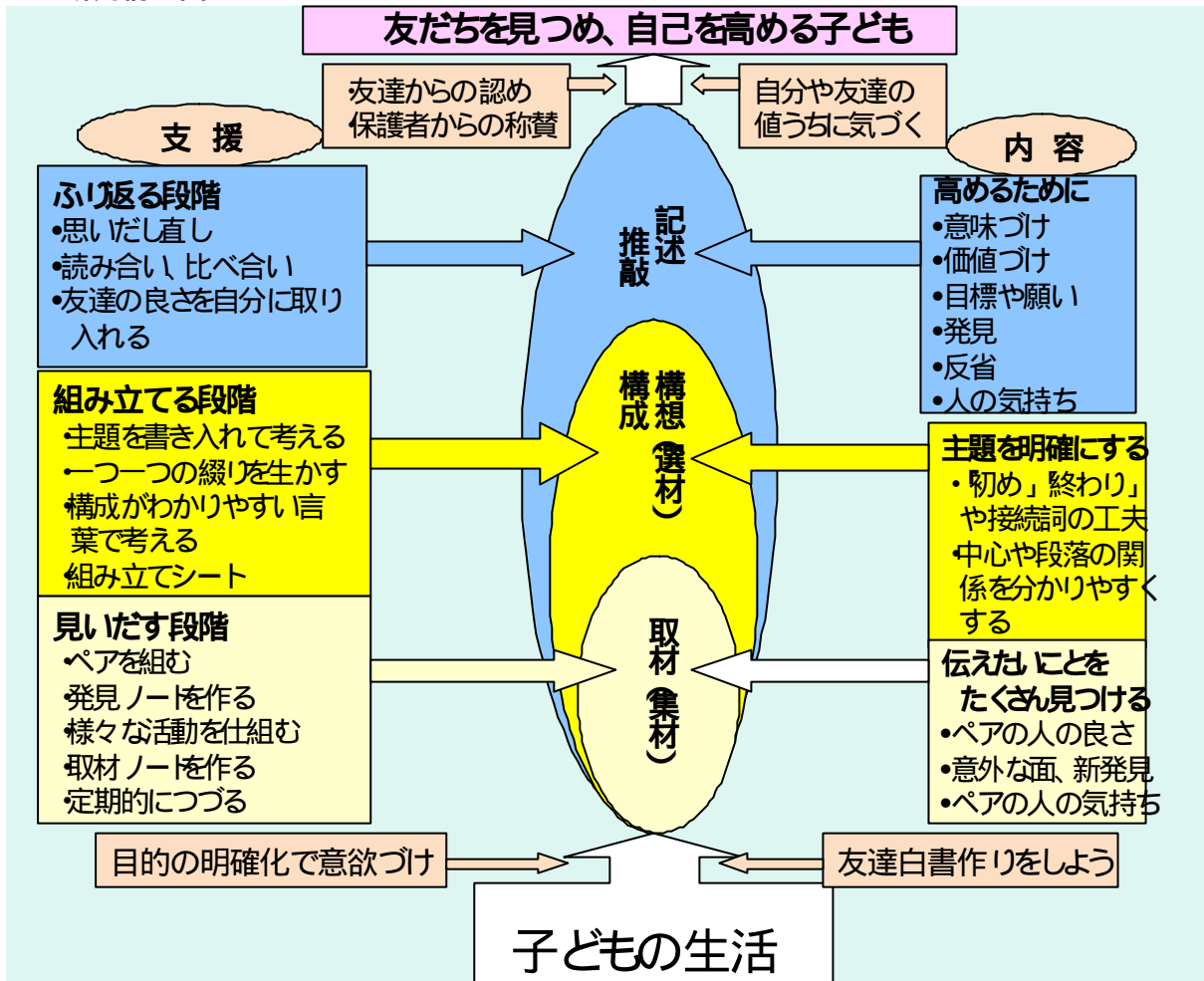
友達の言動をよく見つめ綴るために、各段階で次のような活動を仕組み、その内容や支援を明らかにしていけば、自己を高める綴り方ができるであろう。

「見だし段階」・・・目的を明確にしたうえでペアを組み、意欲的に発見ノート・取材ノート・綴り方ノートに取り組み、友達を観察して綴る。

「組み立てる段階」・・・伝えたい主題を明確にし、組み立てシートで、取材した綴りを生かす構想・構成のしかたをつかむ。

「ふり返る段階」・・・綴った内容を友達の内容と比較しながら、友達の良さを取り入れて自分の考えを深め、自分の生活に生かす。

5. 研究構想図



6. 研究の実際

(1) 単元「4年2組友達白書を作ろう」

ア 第1段階(取材)・・・5時間

- (ア) 10才を期に、自分を見つめる。
- (イ) 綴ることによって友達の良さを見つけて「白書」として発信することを決める。
- (ウ) ペアを決め、毎日取材活動を行う。

イ 第2段階(構想・構成)・・・4時間

- (ア) 集めた綴りから仮の主題を決め、2つを選んで「つなぎ」構成する。
- (イ) 見直しをする中で、本主題を決め、「初め」「終わり」の言葉を考える。

ウ 第3段階(記述・推敲)・・・2時間

- (ア) 「終わりに」の部分みんなで検討し合う。
- (イ) 友達の「終わりに」を採り入れ、書き直しや見つけなおしをする。

(2) 指導の実際

ア 見出す段階(取材)

(ア) ねらい

書く目的意識を明確にして意欲的に取材し、友達の良さや意外な面を発見できる。

(イ) 取り組み

自分の成長のために「友達白書作り」をする意識を持たせ、綴りの方法をつかませる。

綴る友達のことで知っていることを「発見ノート」に、まとめさせる。

1ヶ月間ペアを組んで、いろいろなこと(学習・掃除・係・遊び)と一緒に体験させる。

4行日記を「取材ノート」として使い、毎日ペアの人の言動を書かせる。

1週間に1回、綴りの時間を作り、「綴りノート」に綴ることによって取材活動をする。

(ウ) 考察

「友達白書」作りをする目的で綴らせたことは、友達の見方が深まるこの時期に適し、意欲的に取り組めた要因だった。

「発見ノート」を使って、友達の良さや意

外な面の発見に焦点を当てて課題を持たせたことは、新しい発見をする心構えを作るのに有効。

ペアで席を隣にしたり、いろいろな活動を組んだことは、取材や記述活動をしやすくし、その内容を深めるのに役立った。

4行日記で毎日ペアの人のことを書かせたことは、対象をよく見つめようと意識し続けるのに有効だった。

定期的に綴らせることは、友達の良さや値うちを見つけ、捉えるのに役立った。

イ 組み立てる段階（構想・構成）

（ア）ねらい

今まで気づけなかった友達の良いところや意外な新発見をみんなに伝えるために、どのような綴りを選び、どう組み立てたらいいかをつかむことができる。

（イ）取り組み

自分が集めた綴りから、仮主題を決めさせて、それに合う2編の綴りを選択させる。

仮主題と照らして「組み立てシート」の上で2つの綴りを並べ、接続詞やつなぎの文を入れながら構成して、本主題を作らせる。

本主題に合うように、綴りを見直したり、「はじめ」と「終わり」の文を考えたりさせる。

（ウ）考察

組み立ての仕方をつかませる授業では、設定した主題に対して、大きく2つのパターンができた。しかし、そのためにかえって、「逆転」の構成と「ふくらむ」構成があることを提示することができた。「逆転」や「ふくらむ」という言葉は、他の単元や場面でも使えるので、有効だった。

伝えたいこと（仮主題）を初めに書かせたことが、「組み立てシート」や接続詞を選ぶ時に有効だった。

「組み立てシート」は、本主題を決めるまで、何度も見直すのに役立った。

ウ 振り返る段階（記述・推敲）

（ア）ねらい

記述をより詳しくする中で、友達の気持ちや友達の良さを再認識できる。また、友達の後文「終わりに」を読み合うことで、友達の良さを取り入れて自分を振り返り、さらに後文として生かすことができる。

（イ）取り組み

できあがった綴りをお互いに読み合ったり、再度、主題と比べ合ったりして、不足していることを書き足しさせる。

友達の書いた後文を読み合い、比べ合って、書き直しさせる。

後文に友達の良さを入れて、みんなに知らせるようにさせる。

文集「友達白書」を作り、保護者に感想を寄せてもらう。

（ウ）考察

お互いに読み合って、思い出し直しをさせる中で、記述が詳しくなり、友達の気持ちをより感じる事ができた。

後文の「読み合い」や「比べ合い」をすることにより、いろいろな見方ができることが分かり、友達の良さを採り入れ、自分の後文に生かそうという意欲を持たせることができた。

「君の～所を見習いたい」という文は、書かれた子どものセルフイメージを高めるのに役立った。

文集「友達白書」を発行して、多くの保護者から、ほめてもらったことが自信を深めた。

7. 全体の考察

（1）「見いだす」段階では

「発見ノート」などを使って、目的と伝える相手を明確にしたことで、意欲を持たせることができた。

ペアを決め、一緒に行動したことで、取材活動がスムーズにでき、題材みつけが簡単にできた。また、綴る内容を相談し合ったり、刺激し合ったりできたので、書くことへの抵抗を少なくすることができた。

毎日の取材ノートや週1回の綴りで、書くことを日常化したのも、綴る心の準備に有効だったし、記述指導もタイミングを外さずに

できた。

(2)「組み立てる」段階では

伝えたいことを、仮主題としてまず考えた後、「組み立てシート」を使って本主題を書き込み、2編の綴りを参照しやすくしたことが、作品を構想するのに役立つ。

2つの綴りを構成する組み立てにしたために、子ども達が集めた一つ一つの綴りが生き、子どもが生き生きと躍動している姿をそのまま表すことができた。

(3)「ふり返る」段階では

一度書かせた終わりの部分をみんなで紹介しあい、振り返りをさせたことが、友達の見方を深め、自分を高めることにつながった。

文集「友達白書」を発行することで、保護者から励ましと評価を頂き、そのことがさらに綴ることへと自信と意欲を持たせることができた。

8. 成果と課題

(1) 成果

ア 綴りや日記の内容の深まりと意欲の高まり

子ども達の綴りが詳しくなり、子ども達のものの見方、感じ方が読み取れるようになってきた。

「友達白書」の取り組みは、子ども達にとって綴りの目的を持ちやすく、取材しやすいので、楽しく取り組むことができた。

取り組んだ後もおうちの人にほめてもらったので、自信を深めた。

イ 子ども達の落ち着きとセルフイメージの高まり

この取り組みのあと、S君の保護者から、「前は、いつも私達を怒らせてばかりだったのに、このごろSは、弟にも優しくなって、私達にもおもしろいことを言って、にこにこしています。」と報告を受けた。12月保護者懇談会でも、子ども達が家でも落ち着いてきたという話を聞かせてもらった。

子どもたちへ向けて、保護者に書いてもらった「友達白書」の感想も、子ども達が自信

を持つのに役立った。保護者からの感想を紹介した後に行った意識調査を、昨年のもものと比較すると、セルフイメージの高まりがはっきりと表れている。

友達が自分をしっかり観て、はっきりと自分を認めてくれたことは、自分の値うちに気づくことになり、自信にもなった。

(2) 課題

ア 技術の向上

まだ喜んで書くというところまでは、行き着いていない。「書くことは、面倒くさい。」という意識をまだまだ払拭させきっていない。

綴りの技術を高めて、綴ることに自信を持たせることが必要だ。もっと様子が詳しくわかるように、もっと心情をつかめるように、もっと物事を深く見つめることができるよう、綴りの技術を高める方法を追究していく必要がある。

イ 自信を持たせる場の設定

みんなから認めてもらえるような綴りの発表の場を多く設定したり、工夫したりしていけば、書くことへのさらなる自信を持ち、自然に抵抗なく書くことができるであろう。

そのことによって、さらに、友達の心情をつかみ、自分の言動を見直したり、自分と対話したりして、自分を高めていくことができる子ども達が育つと思う。

ウ 組み立て意識を明確に持たせ、論理性をきたえる

「そして、そして」や「～て、～て」でつないでいく子どもは、「だから」とか「でも」とかを使って、物事をとらえることができている。接続詞と関連させて、「逆転」「ふくらむ」「並べる」関係をいつも意識させていく必要がある。

物語文や説明文と関連させて、子ども達の論理性を鍛えていくことが、生活を高めることにもつながると考える。

終わりに